

#水島朝穂 東京新聞への直言 #高市政権

異様な状況をどう脱するか 高市首相の言葉への危機感と悪法への怒り〈水島朝穂の東京新聞への直言〉

2026年8月27日 12時00分

有料会員限定記事

コメント 0

あとで読む

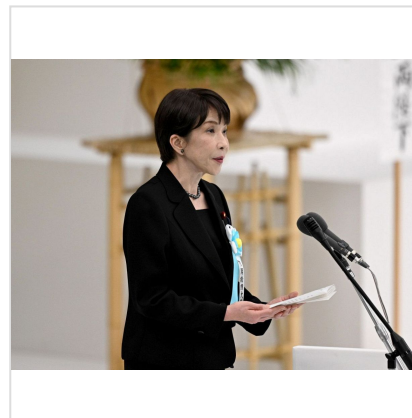


[1年前のこの連載](#)では、「戦後80年の8月ジャーナリズム」について書いた。石破茂首相（当時）は全国戦没者追悼式で「あの戦争の反省と教訓」と述べ、安倍第2次政権発足以降13年間使われてこなかった「反省」の2文字を復活させた。私は、「小さな半歩」としてこれを評価した [🔗](#)。今年はどうか。本紙17日付「ぎろんの森」が挙げた「八月や 六日九日 十五日」という詠み人多数の句。これに即して言えば、6日の広島、9日の長崎の[平和式典における首相あいさつ](#)、15日の[全国戦没者追悼式での首相式辞](#)で、目立たないが、しかし見逃してはならない重要な変化がみられた。

◆「堅持しており」「繰り返させない」

広島と長崎で高市首相は「わが国は『非核三原則』を堅持しており」と、現状を説明するにとどまる表現を用いた。自らの意思として「堅持する」「堅持しながら」と語ってきた歴代首相とは明らかに異なる姿勢である。長崎の被爆者団体代表との面会で、冷淡かつぞんざいな対応をしたことも驚かされる。4カ月後に閣議決定する「安保関連3文書」改定で、非核三原則の相対化が行われることへの布石であろうか。「持ち込ませず」を「撃ち込ませず」に変更するか、そこまでいなくても、核巡航ミサイル搭載艦艇の寄港を可能にする一文を盛り込むか（『毎日新聞』19日付）。その「書きぶり」について、首相は広島での記者会見でも言及を避けた。

続く15日の首相式辞では、「過去を顧み、深い反省の上に立って、再び戦争の惨禍が繰り返されぬことを切に願い」と語った天皇の面前で、「反省」の語を用いなかった。さらに、従来使われてきた「戦争の惨禍を二度と繰り返さない」ではなく、「戦争の惨禍を二度と繰り返させない」と、使役の助動詞を加えた表現へと言い換えた。本紙16日付は、この「せ」という一語について、「他国の行動を抑え込むニュアンスを帯びる」と指摘している。この変更によって、戦争の惨禍をもたらした主体や、その責任の所在に対する視線は従来とは異なるものとなる。昨年11月の「台湾有事」に関する国会答弁を撤回しない高市首相の言葉であるから、なおさらである。「インド太平洋の輝く灯台」という自己陶酔的な表現も気になる。



全国戦没者追悼式で式辞を述べる高市首相＝15日、東京都千代田区の日本武道館で

◆「日の丸」への寄せ書きは

[16日付「首相の一日」欄](#)には、11時9分に日本武道館に到着し、同18分から「靖国神社に向け遥拝（ようはい）」とある。これらを総合してみれば、周辺諸国は、「無反省の日本」に強い懸念と危機感を抱くだろう。

本紙13～18日付は5回連続で「戦後81年 夏」として、戦争関係の投書21本を掲載した。そのうち、17日付の堺正一さん（82歳）は、小学校3年生の時に聞いた先生の言葉が忘れられないという。「皆さん日の丸は美しいと思いませんか？戦争が始まって、日の丸が真っ黒な墨で汚され、若者が戦場に送られるようになったのです。だから私たちは二度とこの美しい日の丸を墨で汚すことがあってはならないのです」と。堺さんは、「私は寄せ書きで埋め尽くされた日の丸の横に立ち、生後100日の幼子を残して出征した父の心中を思って涙が出た」と書く。「日の丸の寄せ書きは戦意高揚のためのもので、多くの若者が戦場で命を落とした一因にもなった」と指摘しつつ、国旗損壊罪が「寄せ書き」を処罰するのかどうか曖昧な点に疑問を呈する。

13日、その国旗損壊罪法が施行された。[本紙13日付1面トップ](#)は、SNS上で「国旗損壊チャレンジ」などと称して国旗を加工し、政治的メッセージを書き込む動画が拡散していることを伝える。また、「損壊デコプロテスト」という抗議の催しで、破った日の丸を飾り布に加工する場面もカラー写真入りで紹介する。読者に「これって損壊？」と思わせるような事例をあえてトップにもってきて、[2面受け](#)で「著しく不快又（また）は嫌悪の情を催させる方法」という、あきれられるほどずさんな要件の問題性を浮き彫りにする。「一見きわめて明白に違憲無効」と言いたくなるほど、処罰対象が不明確な恥ずかしい法律である。

[本紙5日付](#)は200人の憲法研究者の「抗議声明」を紹介する（[全文はここから](#)[🔗](#)）。これまでたくさんの声明に関わってきたが、「法律の成立に抗議する声明」というのはきわめて珍しい。違憲性があまりに明白な法律が、さしたる議論もなしにいとも簡単に成立してしまったことに対する学問的な怒りと、この悪法の運用への重大な懸念、そして「速やかな廃止」に向けた専門家としての決意が込められていることを読み取ってほしい。

◆「意外な人物」に重い口を開かせるインタビューを

最後に、[11日付1面](#)と[総合面](#)に掲載された、石破茂前首相の本紙単独インタビューはいろいろな意味で興味深かった。自民党が、そして自民党内部がいかに変わったかを物語る内容だった。90年代に小選挙区制を導入した際、「党本部と首相官邸の言うことしか聞かない議員ばかりになるぞ」と忠告した党幹部がいたと振り返り、「その通りになった」と言い切る。導入から30年間、すでにその兆候はあらわれてきていたし、それに石破氏自身も関わってきたことへの自戒の言葉こそなかったが、それが極限にまで達していることへの危機意識は感じられた。記者は、「今さえ良ければいいという刹那主義的な人たちが、国民にも国会議員にも多い。今の政治は、1分で結論だけ話せという『ショート動画政治』だ」という言葉も前首相から引き出している。



東京新聞のインタビューに答える石破茂前首相＝国会で

さて、この異様な状況をどう脱するか。政党の枠や従来のしがらみを超え、手を携えられる人々が声を上げるべき時が来ている。本紙には、「意外な人物」を発掘して、重い口を開かせるインタビュー記事などをさらに期待したい。



前回の「直言」で書いたことは…

[紙の新聞だから伝わることもある「国会の創痍」を歴史に刻んだ日〈水島朝穂 東京新聞への直言〉](#)

水島朝穂（みづしま・あさほ） 1953年、東京都府中市生まれ。早稲田大名誉教授。憲法・法政策論。1997年から2011年までNHKラジオ第1放送「新聞を読んで」のレギュラーを務める。「憲法の動態的探究―『規範』の実証」（日本評論社）など著書多数。1997年から[ホームページ「平和憲法のメッセージ」](#)[🔗](#)を29年間更新中。

【関連記事】[武器輸出解禁が転換点…歴史学者・藤原辰史さんは「戦争はもう始まっている」と日本の無自覚を問う](#)

【関連記事】[「立法府の総意」とは何か 国会を押し通す「多数」の根拠が歪んでいたら〈水島朝穂 東京新聞への直言〉](#)

Google検索で東京新聞をお気に入り登録



なるほど！
0



大切にね
0



もやもや…
0



もっと知りたい
0

カテゴリーをフォローする

+ 水島朝穂 東京新聞への直言

+ 高市政権



指導者が満足。そ



大学、とびのびと



新しい絆はここか



豆! 豆!
ト